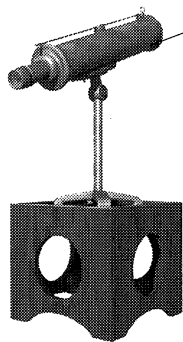


## 能力は有限、知識は無限

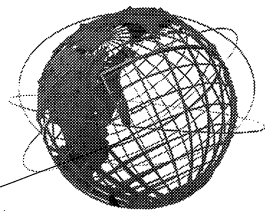
著者	山形 辰史
権利	-
雑誌名	経済セミナー
巻	591
ページ	54-55
発行年	2004-04
出版者	日本評論社
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/579">http://hdl.handle.net/2344/579</a>



## 山形辰史

Yamagata Tatsufumi

1963年生まれ。ロチェスター大学大学院修了(Ph.D.)。現在、日本貿易振興機構アジア経済研究所開発研究センター開発戦略研究グループ長。著書：『開発経済学 貧困削減へのアプローチ』(共著、日本評論社)ほか。

能力は有限、  
知識は無限

## ●技術と人的資本は異なる

1993年にアメリカのロチェスター大学でSergio Rebelo準教授(当時)の経済成長論を履修した。ある授業でRebelo教授に「しばしば人的資本と技術は混同されがちだけれども、両者は財の性質上、大きく異なっている。技術、なかでも他人に簡単に伝達できるように文書や設計図に記されている知識は公共財的性質を持っているが、人的資本はむしろ通常の財に似ている。知識は他人に簡単に漏洩し盗用されやすいが、人的資本はその所有者が専有可能である。その上、人的資本はその所有者が死んでしまえば消失するが、知識は記録として残る。この意味で、人的資本蓄積は有限だが、知識の蓄積は無限に可能である」と教わった。自分はそれまで、新古典派成長理論で仮定される「労働に体化された技術進歩」ばかり勉強していたので、技術と人的資本を同一視していた。それだけにこの説明は非常に新鮮であった。

この話を聞いてから、人的資本と技術の関係についてより深く考えるようになった。なるほど人的資本、すなわち先天的に与えられた、もしくは後天的に獲得された人の能力は、たかだかその人の一生の間だけ有効である。一方、知識はそれを開発した人が死んでも残る。そして既存の知識を前提にして、新しい知識が上乘せされる形で技術革新が進んでいく。人的資本と知識の関係は補完的で、全く新しい知識を開発したり、他人が開発した知識を咀嚼したりするために人的資本が用いられる、と考えるべきであろう。

●異なった知識を同じ能力で：  
古代と現代

このように考えると、うまく説明のつくことがある。例えば現代人はパソコンや電気製品についての知識を持ち、それらを縦横に使こなしている



ちよっと大きめの舟でレンガを運ぶバングラデシュの人々

る。一方で現代人は、古代の人々が持っていた、狩りについての知識や採集についての知識を現在活用してはいない。古代人が活用していた知識のうちいくつかは書物の中に書き記され保存されている。したがってそれらは現代人にも活用可能なのであるが、それらを十分に使いこなすためにはわれわれの能力を用いて古代人が編み出した知識を習得しなければならない。ところが現代人の多くは、古代人が日々活用していた知識よりも、パソコンや電気製品の利用方法を習得するためにより多くの時間を割き、能力を注入しているのである。もしかすると現代人も古代人も、能力の「量」は同じかもしれない。しかしその能力をどの知識の習得に用いるか、そしてそれぞれの時代にどのような知識が利用可能か、が異なっていたのではないだろうか。古代に比べて現代の方が知識のストックは増えているだろう。現代人は古代人と比べて、より広い範囲の知識ストックから、実際に多用する技術を選択しているといえるのではないだろうか。

●異なった知識を同じ能力で：  
日本とバングラデシュ

同じ能力を異なった範囲の知識の習得に用いる例は、一時点の異なった地域の間でもみられることがある。筆者はバングラデシュで、その実例を見出した。

1998年9月、初めてバングラデシュを訪れたとき、首都のダッカは何年ぶりという大洪水に見舞われていた。雨がザーザー降っているわけではない。しかし上流から溢れ来る水が徐々にダッカを水浸しにしていた。どの道はどのぐらいつまで水が

上がってきたから、あそこに行くにはこのルートを取るしかない、といったような情報が人々の間で交わされていた。そんな中、私も同僚の乗用車で、あまり水が上がってきていないと噂される地域を回っていたのであるが、そのときに気づいたのは、そこここで人々が大工道具を持って木製の小舟を造っていたことである。それが一部の地域ではなくて、至る所で皆が舟を造っていたのである。そして彼らはその小舟を巧みに操って用を足していた。

これは日本では考えられないことである。かりに日本で洪水が起こったとして、日本人の誰が自分で舟を造ることができるだろうか。いわゆる舟大工は日本ではかなり少なくなっていると聞く。ここで注意したいことは、日本に木製の小舟造りの知識や技術がなくなったわけではない、ということである。それは何かに書き残されているであろうが、日本人は自分たちの限られた能力を、舟造りの技術習得のために使おうとはしなくなったのである。翻って洪水が多く、そんなときにも自分で自分の生活をやりくりしなければならないバングラデシュにおいては、人々はその能力を舟造りの技術習得のために費やす意義がより大きいのである。

## ●技術革新の成果を開発に生かす

一般に、発展途上国の人々の能力が、先進国の人々の能力より低いとは限らない。先進国の人々がかつて使っていたのに今は全く用いていないような技術を、発展途上国の人々が現在使っていたとしてもそれは両者の間に能力の差があるからとは限らない。同じ能力に異なった使い道を与えているのかもしれないからである。第一、冒頭の見方に従えば、能力は有限だから、それに差があったとしていかほどのものである。有限な能力を異なった世代の人々が用いて、世代から世代へと新しい知識を開発、伝達して、地球全体の知識ストックを増やしていくことによって世界の人々の生活水準が上がってきたことはJoel Mokyr, *The Lever of Riches*, Oxford University Press, 1990等に明らかである。このように知識を無限に拡大していく過程で、エイズやマラリアのワクチン、アフリカの穀物の高収量品種等々の大発明が生み出されることが期待される。